

琉球新報

THE RYUKYU SHIMPO

第36157号

発行所 琉球新報社
〒900-8525那覇市天久905番地
電話 098(865)5111
©琉球新報社2009年

陶器、ガラス、木の葉を一つに

石垣焼窯元の金子さん



「碧海木葉天目茶碗」を手にする金子晴彦さん＝24日、石垣市名蔵の石垣焼窯元

同時焼成に成功

「沖縄の海と山を表現」

【石垣】石垣市名蔵の石垣焼窯元の当主、金子晴彦さん(48)が陶器に木の葉を焼き付ける「木葉天目」とガラスとの融合に成功した。陶器、ガラス、木の葉はそれぞれ焼成温度が違うため、三つがうまく融合するのは非常に難しく、専門家も「今までに見たり聞いたことがなく、かなり珍しい」という。2年間で1200個失敗した末、ようやく成功した「碧海木葉天目茶碗」を手にする金子さんは「何とも言えない自然の葉の色の美しさ。この一つに沖縄の海と山を表現できた」と充実感をにじませた。

金子さんは福岡県出身。元特攻隊員で沖縄への思いが強かった陶芸家の父・島に工房を構え、恭雨さ

んが作った「ようん焼」をベースに、油滴天目の器にガラスを融合させ、沖縄の海のグラデーションを表現してきた。3年前からは「亜熱帯の山のものも表現に加えたい」と思い、地元の桑の葉を使う木葉天目に挑戦した。焼成温度はガラスは1300度以上、陶器は1260度。一方、桑の葉ははるかに低い温度で燃えて消えてしまう。失敗を繰り返しながら徐々に温度帯をつかんで、ついに成功した。東京芸術大

学陶芸研究室の豊福誠教授は「ガラスと陶器と木の葉天目が一緒になったものは今までに見たことがなく、非常に珍しい。かなりの工夫があったものだと思う」と話す。

「八重山の自然にはぐくまれたこの木葉天目の石垣焼で、沖縄の美しさを世界中に広めたい」と目を輝かせる金子さん。今回成功した茶碗は、今年の年末に沖縄本島内のホテルで予定している展示会で無料公開する。

(深沢友紀)